『罪と罰』における「血」の問題

松　本　賢　一

1.「血」の変奏

殺人を扱った小説であれば当然とも言えようが、ドストエフスキイの『罪と罰』(1866) では「血」(кровь) もしくはこれに派生する語の使用頻度が高い。小説の中で最初に「血」への言及があるのは、第１部第５章、いまだ犯行を犯していないラスコーリニコフが、ゆえなくして殴打され息絶える馬に縋り付いて泣く自らの幼年時代を夢に見て、その夢から覚めた直後に、「一ヶ月の間」自身の中で熟してきた金貸しのアリョーナに対する強盗殺人の計画が、到底自分の手に負えるものではないと自らに確認する独白の中においてである。

> (・・・)「ああ！」と彼は叫んだ。「一体俺は本当に斧を手にとって頭を殴り、頭の骨をぐじゃぐじゃに砕くことができるのか…べとべとと暖かい血の中で滑り、錠を壊し、盗み、震えるのだろうか。全身に血を浴びて隠れるのだろうか…斧を持って…ああ、本当にそうするんだろうか？」＜６－50＞①

手にかけた犠牲者の「血」と格闘することになるかも知れぬというラスコーリニコフのこの予感は、ほぼ的中する。金貸しアリョーナが、確実に一人で在宅している時間を偶然に知り得た時から「意志と理性の衰え」＜６－58～59＞にとらわれていたラスコーリニコフは、犯行現場であるアリョーナの部屋でも、下宿に帰ってからも、自分の手や凶器の斧、そして衣類に付着した「血」を拭い落とすことに懸命になる。たとえばアリョーナを殺害した後、

「言語文化」5-2：299－313ページ　2002.
同志社大学言語文化学会 ©松本賢一

不意に帰宅した彼女の義妹リザヴェータをも殺してしまったラスコーリニコフについては次のように描かれている。

（・・・）だがある種の放心状態が、物思いとさえいえるようなものが少しずつ彼を支配し始めた。しばらく彼は我を忘れたようである、というよりも、重要なことを忘れて些細な事柄に執着していた。とはいえ、台所を覗いて腰掛板の上に水を半ばまで満たした桶を見つけると、彼は両手と斧を洗おうという気になった。彼の両手は血だらけでべたついていた。彼は斧を刃の付いている方から水の中へ落とし、窓際の割れた小皿にのっていた石鹸のかけらを引っ掴むと、いきなり桶の中で自分の両手を洗い始めた。手を洗い終えると、斧を引き出して鉄の部分を洗い、そして長々と、およそ三分ほどもかけて、石鹸まで使って血まみれになっている木の部分を洗った。それからその台所に掛け渡したロープに干してあった手近の洗濯物ですっかり拭き、その後窓際で長い間かかって念入りに斧を調べた。（・・・）＜６－65～66＞

また、犯行の翌日、下宿で目覚めた時のラスコーリニコフは次のようである。

（・・・）十分に明るかったので、彼は急いで身を検めた。全身を、足先から頭まで、服の全体を、跡が残ってやしないか？だがそのままでは無理だった。悪寒に震えつつ、彼は服をすっかり脱いでもう一度調べ始めた。糸一本、布地の端に至るまですっかり引っ繰り返し、自分の目を信用できずに、三回ほども点検を繰り返した。しかし何も痕跡は無いようだった。ただズボンの裾が裂けて房のようになってぶら下がっている、その房のところに、凝固した血の跡が色濃く残っていた。彼は折り畳み式の大型ナイフを手にとって、その房を切り取った。もう何もないようだった。（・・・）＜６－71＞

ここでラスコーリニコフは、盗んだ財布や品物をまだポケットから取り出していなかったことを思い出し、それらを壁紙の裏に隠すが、自分が思考力を失いつつあるのではないかという不安に悩まされる。

> （・・・）このとき彼の頭に奇妙な考えが浮かんだ。もしかしたら、彼の衣類はすっかり血に染まっているなり、またひょっとして、沢山の汚点（しみ）があるなりするのだが、自分にはそれが見えなくて気付かないのではないか。分別が衰え、粉微塵になっているせいで... 頭が朦朧としているせいで... 不意に彼は財布に血が付いていたことを思い出した。「あっ！するとポケットにも血が付いているに相違ない、だって俺はあの時まだ濡れている財布をポケットに突っ込んだのだからな！」すぐさま彼はポケットを裏返した。すると... 思った通りだ... ポケットの中の布に痕跡が、汚点（しみ）が付いている！（・・・）この時陽の光が彼の左の長靴を照らした。長靴から覗いている靴下に痕跡が見えたようだった。彼は長靴を脱ぎ捨てた。「やはり跡が残っている！靴下の先っちょに血が染み込んでいる」きっと彼はあの時あの血溜まりに不用意に踏み込んだのだ...「さて、こいつをどうしたもんだろう？この靴下や、ズボンの切れっ端や、ポケットやなんかを？」（・・・）＜６－72＞

二人の被害者の「血」は、執拗にラスコーリニコフに纏わり付き、べた付き、こびり付く。手や凶器に付いた血を洗い流しても、血の染みた靴下やズボンの切れ端、ポケットの布地を隠しおおせても、「血」は強迫観念となって彼を苦しめ続ける。警察に呼び出され、事件の発覚を恐れて盗品を処理し、下宿に帰ったラスコーリニコフは、警察の副署長イリヤー・ペトローヴィチが下宿の女将を打擲する夢を見る。夢から完全に覚め切らないラスコーリニコフは、食事を運んできた女中のナスターシヤに、なぜ副署長が女将を殴るのか、と質問するが、ナスターシヤはこの常軌を逸した質問に無言の凝視をもって答えるだけであった。

（・・・）「ナスターシヤ、どうして黙っているんだ？」おずおずと、弱々しい声で彼は言った。

「それは血だよ」漸く彼女は静かに、まるで独りごとを言うように答えた。

「血！．．何の血だ？」蒼褪めて壁の方へ身をずらしながら彼は呟いた。（・・・）＜６－91＞

ここでナスターシヤはラスコーリニコフの身の周りに何らかの血痕を認めてこのようなことを言ったのではない。ラスコーリニコフの妙な夢が、血が濃くなったことによる病的な体調に起因するのだという、彼女なりの診断を下したのである。しかしラスコーリニコフは彼女の偶然発した「血」という言葉にほとんど恐怖に近い驚愕を覚える。この時のラスコーリニコフにとって、「血」とはアリョーナとリザヴェータの血、自分が洗い忘れ、隠し忘れたかもしれない犯罪の証跡以外のものではあり得ない。

第２部第６章でラスコーリニコフは、熱に浮かされたように犯行現場を再訪するが、ここでも彼は自分によって流された「血」のことを気にかけ、アリョーナの部屋を改装している職人たちに次のように語りかける。

（・・・）「床を洗ってしまったのだな。ペンキを塗るのか？」とラスコーリニコフは続けた。「血はないのか？」

「何の血だね？」

「婆さんと妹が殺されたんだ。ここはすっかり血溜まりになってたんだぜ」（・・・）＜６－134＞

このようにラスコーリニコフにとって「血」という言葉は常に自らが犯した殺人の記憶と結び付く。その「血」は具体的かつ感覚的であり、彼の意識にべたべたと纏い付き、こびり付いて離れようとしない。ところが、小説の第２部第７章で、馬車に轢かれて胸を潰され、頭部にも重傷を負って血まみれになったマルメラードフを自宅に送り届ける際に洋服を血で汚してしまった時から、「血」はラスコーリニコフにとって嫌忌の対象ではなくなってし

まう。

マルメラードフの臨終場面にも「血」は効果的に用いられている。マルメラードフの顔面を覆う血、意識を取り戻して深く息をついた時にその口の端に滲み出る血、医師が治療にあたるときに露わになる血でぐしょぐしょになったシャツ、そしてマルメラードフの妻で肺を病んだカチェリーナ・イヴァーノヴナが、激しく咳き込んでハンカチの中に吐き出す血... しかしこれら悲惨な「血」の情景は、ラスコーリニコフを脅かすことはなく、むしろ彼に力を与える。今は寡婦となったカチェリーナ・イヴァーノヴナになけなしの金を与えるラスコーリニコフは、マルメラードフ家にとって救済者として現れる。このとき初めてマルメラードフの娘ソーニャに会ったことも彼の気持ちを高揚させた一因であったろう。社会の不公正を象徴するかの如きマルメラードフ家の悲惨、世界の成り立ちの中で常に犠牲の役割に甘んじなければならない「世の続く限り永遠なるソーニャ」を目にし、自分が救済者として振る舞い得たことによって、ラスコーリニコフは自身の犯行が自己の救済のみを目的としたものではなく、「人類の施恩者」になるための「第一歩」でもあったことを想起したかのようである。

マルメラードフ家を辞したラスコーリニコフは、階段の途中で、事故の事後処理をするべくやって来た警察署長ニコヂーム・フォミッチに出会う。署長はこの時、ラスコーリニコフが血で汚れていることに目を留める。

> （・・・）「だが、それにしても、あなたは血だらけですな」軒燈の光でラスコーリニコフのチョッキに付いた生々しい汚点（しみ）を認めて、ニコヂーム・フォミッチは言った。
>
> 「ええ。濡れてしまいました... 僕すっかり血まみれですよ！」となにやら特別な顔つきをしてラスコーリニコフは言い、それからにやりと笑ってひとつ頷くと階段を下りていった。（・・・）＜6－145＞

あれほど嫌忌していた「血」に染まって「にやりと笑」うラスコーリニコフのこの不敵で挑戦的な態度は、明らかに、彼の中に生じた心理的な変化を物語っている。言うまでもなく、ラスコーリニコフ自身によって流された

「血」とマルメラードフの「血」は性格を異にするものであるが、いずれの「血」によって手を汚すことも同じように思いなすところにラスコーリニコフの自己欺瞞は潜んでいるのであり、このことから「血」の抽象化が生じていくのである。

人間は生まれながらにして「凡人」と「非凡人」に分かれており、「非凡人」は自らの新しい言葉を発するために「凡人」が順守している慣習、法律を踏み越える権利、時には殺人を犯す権利さえ持っているというラスコーリニコフの思想が『罪と罰』の中で明かされるのは、小説もほぼ半ばに差し掛かった第３部第５章、予審判事ポルフィーリイ・ペトローヴィチとの最初の会見においてである。このときラスコーリニコフは、自分が半年ほど前に書いた犯罪についての論文のことをポルフィーリイによって思い出させられ、そこで仄めかしてあった非凡人の思想を開陳するように仕向けられる。ここで、ラスコーリニコフを挑発するために彼の論文の概要を話すポルフィーリイの言葉には「血」という言葉がまったく含まれていないのに対して、ラスコーリニコフが敢えて「血」という言葉を多用することに注意しなければならない。このとき彼の口から出る「血」という言葉は、犯行の直前直後に彼を脅かし、苦しめた具体的で感覚的な「血」を指すものではなく、マルメラードフの血にまみれてその家族の救済者として振舞った時を契機として、抽象的な「流血」や「殺人」に意味を転じた「血」である。

> （・・・）それから、僕の記憶では、論文でこう論旨を発展させたと思いますよ。すべての... そう、たとえば、古代に始まり、リュクルゴス、ソロン、マホメット、ナポレオン等々と続いた人類の立法者や指導者たちですね。彼らは皆、新しい法を作ることによって、社会によって神聖と見なされ、父祖の代から受け継がれてきた古い法を破壊し、血が（それは時によっては全く無辜の血であり、古い法のために勇敢に流される血なのです）自分の役に立ちさえするなら、もちろん血を前にしてたじろぐことがなかった、というそのことだけでも、ひとり残らず犯罪者であった、とね。こういった人類の施恩者や指導者の大部分がとりわけ恐ろしい流血者であったということは注目して

も良いことですよ。これらの人々（第二の範疇の人々ですよ）の犯罪は、言うまでもなく、相対的で多種多様なものです。彼らの大部分は、実に多様な意思表明をして、より良きもののために現在あるものの破壊を要求します。しかしもしも自己の思想のために死骸や血でも踏み越える必要があるときには、彼は自分の中で、良心に照らして、血を踏み越える許可を自分に与えることが出来ると思うのです... とはいえそれは、思想やその思想の規模次第ですよ。ここの所をご注意ください。（・・・）＜６－199～200＞

これ以後ラスコーリニコフにとっての「血」は、ただ一度の例外を除いて[②]、自らの具体的な殺人行為を想起せしめることのない、現実感を欠いた抽象的観念としての殺人行為のみを意味するようになる。それは、ポルフィーリイの示唆によって彼が新たに出会った自らの思想――非凡人の思想――に身を鎧い直して自身の行為――強盗殺人――に意味を与えようとしていく過程に見合っているのである。ポルフィーリイとの会見に続く第３部第６章で見る夢の中で、ラスコーリニコフは再び老婆の脳天に斧を打ち下ろすが、その際「血」に関する描写が全く無いことも特徴的であると言える。

小説の第６部第７章では、既に自首を決意しながらも、なお自分の理論に誤りを見出すことのできないラスコーリニコフが、妹のドゥーニャと次のようなやり取りをしている。

（・・・）「兄さん、兄さん、何てこと言うの！だって兄さんは血を流したのよ！」絶望してドゥーニャは叫んだ。

「その血をみんなが流しているのじゃないか」と、ほとんど逆上して彼は引き取った。「その血はまるで滝のように、世界で流されているしいつも流されてきたじゃないか。シャンペンのようにその血を流し、その血のゆえにカピトルの丘に祭り上げられたり、後になってから人類の施恩者と呼ばれたりしてるんじゃないか。」（・・・）＜６－400＞[③]

ここでドゥーニャが問題にしている「血」とは、言うまでもなく、兄によって流されたアリョーナとその義妹リザヴェータの血であり、かつてラスコーリニコフを脅かし、恐慌に陥れた血である。だがもはやラスコーリニコフにとってはそのような具体的な血は問題ではない。彼にとっての「血」とは、自らをそれに擬そうとした「非凡人」が踏み越える抽象的な血である。『罪と罰』における「血」の表象は、主人公ラスコーリニコフの変貌に合わせて、具体的で感覚的なものから抽象的でイデオロギー性の強いものへと変奏されていくのである。

2.「血」の時代

ラスコーリニコフと予審判事ポルフィーリイとの三度の会見のうち、最後のものが描かれているのは第６部第２章である。二度目の会見で、ペンキ屋ミコールカの虚偽の自白という思わぬ邪魔が入ったためにラスコーリニコフを追い詰めることの出来なかったポルフィーリイは、ミコールカがアリョーナ殺しの犯人であることはあり得ないことを伝え、自首を勧めるためにラスコーリニコフの下宿を訪れたのであった。物証によってではなく、事件の心理的な側面からラスコーリニコフが真犯人であることを説くポルフィーリイの言葉の中に、「血」に言及した次のような一節がある。

> （・・・）「いいえ、ロヂオン・ロマーヌィチ、ミコールカではありませんよ！これは幻想的で暗鬱な事件、現代的な事件です。人の心が濁り、“ кровь « освежает » ”というフレーズが引用され、生活が快適さという点でばかり擁護される、われらの時代の事件なのです。」（・・・）＜６－348＞

ポルフィーリイはラスコーリニコフの犯行に1860年代半ばという時代の刻印を読み取っている。雑階級出身の知識人による言説が力を持ち、皇帝による「上からの」農奴解放とそれに伴う諸改革の進行と共に社会が混乱を極め、既成の秩序が否定され、それでいながら新しい秩序が見出されない時代を、ポルフィーリイは、「人の心が濁り」、「生活が快適さという点ばかりで擁護

される」と形容している。しかしながらここで問題となるのは、同様に「われらの時代」の特徴とされている「“кровь « освежает » ”というフレーズが引用され」るという言葉の解釈なのである。

ロシア語の<кровь>（血）という女性単数名詞は、主格と対格で同じ形態をとる。すなわち<кровь>は、この形態のままで主語としても直接補語としても用いられる。ロシア語は語順が自由に変化するため、名詞<кровь>が動詞<освежает>（新鮮にする、一新する、清々しくする）の前に置かれているということだけをもって主語であると決めることは出来ない。従って、“кровь « освежает » ”というフレーズは、「血が「一新する」」とも「血を「一新する」」とも訳すことが出来るのである。人の心が濁った「われらの時代」に口にされるフレーズとしてはいずれが適当であるのか。

言うまでもなく、“кровь « освежает » ”というフレーズの典拠が明らかになれば、この問題は容易に解決するであろう。しかしながら、このフレーズが何から「引用」されていたかは今なお不明であり、文脈や当時の社会状況等を材料に推測を重ねていくしか方策がないというのが現状である。決定的な典拠を示し得ないままに、ロシアの研究者C. B. ベローフはこのフレーズに関して次のような注釈を付けている。

> Г.Ф.コーガンの推測によれば、ポルフィーリイ・ペトローヴィチのこの言葉には、『ゴーロス』紙（1865. 4. 7. №95）海外雑報欄の次の箇所への暗示を見ることが出来るという。「ケーニヒスベルグ氏は、先頃江湖に出たナポレオン通信第16巻とナポレオンの侍医コルヴィザルの証言に依拠して、ナポレオンに必要であったのは征服ではなく、ただ興奮の手段としての、酩酊としての戦争であったと説明している。（・・・）ナポレオンの血液循環は不正確で、極めて緩慢であった。（・・・）戦争のさ中にのみ彼の気分は良好で、その脈拍は正確に、そして正常な速度で打つようになるのであった。（・・・）著者はこの点にナポレオンとシーザーの相似点を見出している。著者はシーザーの中に、戦争によって絶えず自己を興奮させていたいという同様の欲求を見ているのである。（・・・）④

自らを「非凡人」に擬そうとするラスコーリニコフが絶えずナポレオンを引き合いに出すことと、ラスコーリニコフの「非凡人」についての論文が、ナポレオン３世の著書『ジュリアス・シーザー伝』に触発されたものであるという通説を考え合わせれば、ベローフの紹介しているコーガンの説にも耳を傾けるべき点はあろう。しかしながら、コーガンの推測するように、ナポレオンの血液循環に関する記事をポルフィーリイが暗示しているとすれば、“ кровь « освежает » ”というフレーズは「血を「一新する」」（もしくは「血を「清々しくする」」）と解釈するほうが適当だということになろう。だが、ラスコーリニコフの幻想的で暗鬱な犯罪が起こっても不思議ではない時代、「人の心が濁った」時代を象徴する言葉として、「血を「一新する」」という言葉が妥当であるとは言い難い。第１節で見たように、『罪と罰』における「血」という語が、小説の後段に至って具体性を失い、専ら抽象的に流血や殺人を意味するようになるという事情を勘案しても、ここでポルフィーリイの口から極めて具体的、もしくは生理学的とも言うべき「血」への言及がなされるというのも不自然であると言えよう。

『罪と罰』の英訳、日本語訳のうち、手近なものでは問題の箇所は次のように訳されている。

(1)DAVID McDUFF訳//(—)This is a murky, fantastic case, a contemporary one, an incident that belongs to our own age, an age in which the heart of man has grown dark and muddied; in which one hears the saying quoted that “blood reinvigorates”; in which material comfort is preached as life’s only aim.(—)

(2)JESSIE COULSON訳//(—)This is an obscure and fantastic case, a contemporary case, something that could only happen in our day, when the heart of man has grown troubled, when people quote sayings about blood “refreshing”, when the whole of life is dedicated to comfort.(—)

(3)CONSTANCE GARNETT訳//(—)This is a fantastic, gloomy business, a modern

case, an incident of to-day when the heart of man is troubled, when the phrase is quoted that blood ‘renews’, when comfort is preached as the aim of life.(—)

(4)米川正夫訳//(・・・)これは幻想的な事件です、陰鬱な事件です、人心が溷濁し、血で『一掃する』という文句が到るところに引用され、全生活が安逸（コムフォート）を旨とする現代の出来事です。(・・・)

(5)中村白葉訳//（・・・）これは空想的な事件ですよ、陰鬱な、現代的な事件ですよ、人心が混濁し、血で「清める」という文句がさかんに引用され、一切の生活が安逸を貪ろうとする現代の産物です。(・・・)

(6)北垣信行訳//(・・・)あれはファンタスティックな、暗黒な事件です、人心が濁り、血は『すべてを清める』といったような文句が盛んに引用され、快楽こそ人生のすべてであるなどという説教の横行する現代の事件ですよ。(・・・)

(7)江川卓訳//（・・・）これは空想的な、陰鬱な事件でしてね、現代的な事件なんです。人間の心がにごり、血が『清める』なんていう言葉がさかんに引用され、快楽こそ人生のすべてだと宣伝される現代の事件なんですよ。(・・・)

ここに掲げた７つの例のうち、やや明晰を欠く（２）を除いた６例は、助詞の使い方、動詞＜освежает＞の訳し方で微妙な相違を見せながらも、明確に＜кровь＞を主語として捉えている。これは、意識的にせよ、無意識的にせよ、これらの翻訳者たちが、ポルフィーリイの言う「われらの時代」が、「血」（流血、殺人）によって何かあるものを「一新」することを良しとする時代であると認めていたことを示していると言えよう。

いわゆるナロードニキが、ヴ・ナロード（人民の中へ）運動の挫折から、皇帝暗殺をも射程にいれたテロリズムへと戦術転換していったのは1870年代末のことであり、それゆえ『罪と罰』の時間的背景とされる1865年を「血が

「一新する」というフレーズが引用される」時代と見ることにはあるいは疑義が残るかもしれない。しかしながら、実際にはこの時期、ナロードニキの戦術転換よりも遥かに早く、「血」への、流血を伴う武装闘争への呼び掛けが為されていた。先にも述べたように「血が「一新する」」というフレーズの典拠は明らかではないが、ポルフィーリイのみならずラスコーリニコフも目にしたかもしれない、そしてドストエフスキイは確実に目にしていた「血」へのアピールとして、1862年５月にペテルブルグで撒かれた檄文『若きロシア』を挙げることができる。[5]

П.Г.ザイチネフスキイの起草になるこの檄文は、「共和国」という言葉がロシアで初めて活字にされたという点で有名であるが、ロシア国民を、皇帝とその家族を頂点とし、地主貴族、役人、軍隊から成る抑圧者のグループと、彼らによって収奪される民衆（ナロード）のグループに二分し、前者を倒し共和国を建設するための手段として徹底した武装闘争を宣伝したことによっても記憶されるべき文書である。ドストエフスキイがこの『若きロシア』を読んだことについては、『作家の日記』1873年４月号に明らかであるが[6]、ここで問題にしなければならないのは、政治的にはむしろ保守派の側にいた彼がこの檄文にどのような印象を持ったかということではなく、この檄文のアピールに生々しい「血」のイメージが看て取れるということなのである。

> （・・・）現代人を滅ぼし、それとの闘争に現代人の最良の力が費やされているこの重苦しく恐ろしい状況からの出口はただひとつ――革命、血まみれの、容赦ない革命（революция кровавая и неумолимая）である。現代社会のすべての基盤を例外なく根源的に変革し、現存の秩序の擁護者たちを根絶やしにする革命である。
>
> 血の河が流れる（прольется река крови）ことも、また、無辜の犠牲者が非業の死を遂げるかも知れぬことも我々は知っているが、それでも我々はこの革命を恐れはしない。我々はそういったことすべてを予見し、それでもなお革命の到来を歓迎する。我々は一人一人がその命を犠牲にする用意がある。ただ久しく待ち望んだ革命の一刻も早く訪れんことを！（・・・）

（・・・）皇帝の陣営にある諸君には、我々はこのことを予告し、注意を与えておくが、諸君がその周囲に群れなしている諸君の上司たちに関しては一言も言うまい。ロマノフ家の者たちは... 彼らには別の清算をして貰う！民衆の不幸に対して、長きにわたる圧政に対して、現代の要求への無理解に対して、彼らには自らの血で（своею кровью）清算して貰う。贖罪の生贄としてロマノフ王家には命を捨てて貰う！（・・・）

（・・・）我々は西欧の歴史を研究した。そしてこの研究は無駄には終わらなかった。我々は（18）48年の哀れな革命家たちどころか、（17）92年の偉大なテロリストたちよりも首尾一貫するつもりである。現存の秩序を転覆するために、（17）90年代のジャコバン党員によって流されたのよりも３倍も多い血を流す（пролить втрое больше крови）ことになろうとも、我々は怖じ気付きはしない。（・・・）⑦

「血の河が流れる」ことも「無辜の犠牲者が非業の死を遂げる」ことも恐れないと宣言する檄文の登場するのが、ポルフィーリイが言う「われらの時代」であるならば、その時代の中で人の口の端に上る“ кровь « освежает » ”というフレーズは、やはり「血が一新する」と読むのが至当であろう。ラスコーリニコフが社会主義者でも革命家でもないことは言うまでもないが、そもそも彼がドストエフスキイによって「空中に瀰漫する奇妙で「未完成な」思想」＜28Ⅱ－136＞に毒された青年として構想されていたことを思えば、「血」の臭いに満ちたこの『若きロシア』の思想をも彼が呼吸したであろうと考えることは、あながち無理なことではない。第１節で引いた彼の「非凡人」の哲学が、『若きロシア』と同様に、「自己の思想のために死骸や血でも踏み越える必要があるときには」「血を前にしてたじろぐ」ことはないと説いていたことを想起すべきである。

付け加えるならば、犯行計画を練っていたラスコーリニコフが、なぜか「ことは斧でしてのけねばならない」＜６－57＞と早くから決めていた理由も、あるいはこの檄文の中に隠れているかもしれない。『若きロシア』は、次の一節をも含んでいるからである。

（・・・）自らの力と、民衆の共感、そして偉大なる社会主義の事業を最初に実現する役割を担ったロシアの栄えある未来への信念に満ちたこの最後の機会に、我々が発する叫びはただひとつである。「斧を取れ」そして... そして打つべし、皇帝の一統を、容赦することなく。彼らが現在我々を容赦せぬように。（・・・）

注

(1) ドストエフスキイからの引用はすべてФ.М.Достоевский. Полное собрание сочинений в 30-ти тт., Ленинград,1972-1990.によるものとし、煩雑を避けるために本文では＜　　＞内に巻数と頁数のみ示した。

(2) 小説の第３部第６章では、「地から湧き出たような男」に「お前は人殺しだ」と決め付けられ、犯行の露見を恐れて惑乱するラスコーリニコフの姿が描かれているが、このときの彼の独白に、次のような一節がある。
（・・・）「僕はこのことを知っていなけりゃなかったんだ」と彼は苦々しい薄笑いを浮かべながら思った。「自分というものを知っていながら、予感していながら、よくもまあ俺は斧を手にとって血に染まったりできたもんだ。（・・・）＜６－210、傍点部分は原文でイタリック＞

(3) 『地下室の手記』（1864）の主人公に、ドストエフスキイはこのときのラスコーリニコフと同様のことを言わせている。

（・・・）周囲を見回してみたまえ。血は河となって流れている。それも陽気に、まるでシャンパンかなんぞのように。これこそボックルも生きていた我らが19世紀というものなのだ。偉大にして現代の人なるナポレオンを持ち出してもいい。（・・・）＜５－～112＞

(4) С.В.Белов. Роман Ф.М.Достоевского «Преступление и наказание», Комментарий,М. ,1985, с .208.

(5) 小説の時間的背景からは外れるが、ドストエフスキイが『罪と罰』を執筆掲載中であった1866年の４月には、カラコーゾフによる皇帝アレクサンドル２世暗殺未遂事件が起きている。1865年夏のポルフィーリイがこの事件を予測し得た筈もないが、彼に「われらの時代」を語らせる時のドストエフスキイが、『若きロシア』のアピールに呼応するがごときこのテロ行為を意識していたということも十分に考えられる。

(6) ここでドストエフスキイは、自分が読んだ檄文が『若き世代に』であったと回想しているが＜21－25＞、その後の研究でこれはドストエフスキイの記憶違いで、このとき彼が読んだのは『若きロシア』であったというのが通説になっている。＜21－394＞

(7) 『若きロシア』のテクストは、M.レムケの『1860年代のロシアにおける政治裁判』より取った。檄文というものの性質上、ここで引いたものが唯一真正のテクストであるという保証はない。Мих.Лемке. Политические процессы в России 1860-х гг.,М.-Петроград, 1923, с .508-518.

The “blood” in *Crime and Punishment*

Ken’ichi MATSUMOTO

Key words: Dostoevsky, Crime and Punishment, The Young Russia